

一、次の①～⑩の——線部について、漢字をひらがなに、ひらがなを漢字に改めなさい。

- | | | | |
|---------------|-------------|---------------|-------------|
| ① コンサートの開演時刻。 | ② 祖父母と同居する。 | ③ 条件が整う。 | ④ 寄宿舎での生活。 |
| ⑤ 税率が下がる。 | | | |
| ⑥ 作文のせいしよをする。 | ⑦ 外出をきよかする。 | ⑧ しょうどく液がしみる。 | ⑨ 鳥のすを見つける。 |
| ⑩ てきかなアドバイス。 | | | |

二、次の①～⑤のことわざの意味として最も適当なものをそれぞれ次の1～5より選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- | | | | |
|---------------|-------------|--------------|-----------|
| ① 目からうろこが落ちる。 | ② つめに火をともし。 | ③ 先んずれば人を制す。 | ④ 敵に塩を送る。 |
| ⑤ 光陰矢の如し。 | | | |

- 1、だれよりも先に行えば有利な立場に立てる。
 - 2、あるきっかけで迷いからさめる。
 - 3、月日はあつという間に過ぎていく。
 - 4、苦勞して儉約する。
 - 5、敵が困っているときに助ける。

三、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

生物は最初から、いまあるのと全く同じ姿や性質をしており、ずっと変わることがなかった。

これが進化論以前の考え方です。このような考え方が違和感を持たれなかったのはなぜでしょうか。

様々な理由が考えられますが、最もそれらしいのは、何十年という時間が経過しても「生物が変化していくようには見えな
い」という理由でしょう。

私は子どもの頃、東京の郊外こうがいに住んでいましたが、その頃は近所にまだ雑木林があつて、クワガタやカブトムシを捕りに行つたものでした。

それから数十年が過ぎ、いまでは研究材料としてノコギリクワガタを使っていますが、私が子どもの頃と全く変わらない姿をしていますし、いつ、どこにいて、何をしているかといった生態せい的性質も変わりません。読者の皆さんも、ひいじいさんが人間ではなかった、という人はいないでしょう（いたら申し訳ない）。

ノコギリクワガタは一年で成虫になるので、数十年間には数十世代の交代を繰り返しているはずですが、その姿も性質も変わっていないように見えるのです。ほとんどの生物が、数十年という時間の中では全く変わっていないように見えます。昔の人間の寿命じゅみょうは五、六十年だったので、これは一生変わらないというのと同じです。このような状況の中で、昔の人が「生物は時間とともに変化しない」と考えるのは自然なことだったでしょう。

まして、キリスト教の聖書では、地球が創造されたのはせいぜい数千年前のことであり、全ての生物はそのときに神によって作られたとされています。敬虔けいけんなキリスト教徒であれば、これを疑うのは神を疑うのと同じことですから、数十年の時間変わらない生物たちは、数千年前にも同じであつたと考えても不思議ではありません。

こうして、①進化論以前の生物観が形作られていったのでしよう。

現実には、ほとんど全ての生物が、ごく短い時間の中で変化していきます。それは「成長」あるいは「老化」と呼ばれる現

象です。

十年前のあなたといまのあなたは違うでしょう？

写真を見れば「あの頃は若かつたな」とか「まだ子どもだったな」と思うことでしょう。他の生物も同様です。鳥ならば、卵、ヒナ、若鳥、成鳥と育っていきますし、昆虫ならば、卵、幼虫、成虫というふうに成長します。

バクテリアですら、分裂ぶんれつした直後に分裂することはなく、ある程度大きくなってから分裂を始めます。生物はその一生の間に必ず成長するのです。つまり時間とともに変化する。

②なぜ全ての生物が成長するのか？ 分裂して増えるバクテリアなどならば、成長しないで分裂すると体がどんどん小さくなってしまうので成長が必要なのでしょう。

成長しないで小さな子どもを産むのならば大丈夫な気がします。生まれた子どもが大きくならずに繁殖はんしよくするならば、やはり、体がどんどん小さくなってしまいますね。結局、親と同じ大きさの個体を再生産するときには、どこかのステージで必ず「成長」が必要になります。ですから、「生物は一生の間にどんどん変化していく存在」なのです。

にもかかわらず、生物は変化しないと長い間人々は信じてきました。

どうしてでしょう？ おそらく、私たちが知る全ての生物は、一生の間に変化しますが、生まれた子どもも親と同じように変化するので、「生涯」という単位で見ると親と子は違わないと見えるからでしょう。先ほどのノコギリクワガタの例では、数十年経ってもノコギリクワガタは昔と同じように卵から孵かえり、幼虫として成長し、蛹さなぎになって親虫になります。

人間、鳥、馬、魚。

私たちが知る全ての生物がこのような生涯しょうがいを繰り返します。

イ 昔の人は、生物は変わらない、種類の違いはあってもひとつの種類はずっと同じであり続ける、と信じ込んだのです。なぜならば、私たちが生きている間に別の種類になっていく生物など見たことがないからです。

一種類の生物が変わらずに存在し続けるならば、「論理的」に考えると、世界の全ての多様な生物は別個に誕生し、ずっとそのままの形で存在し続けたとする以外にありません。

生物を誕生させたのが神様だとすれば「創造説」になります。このように考えると、生物は変化せずずっと昔から今のままだったという考え方は、観察事実と一致する X を持っていたともいえます。

科学の世界における「理論」は、観察事実によって否定されない限り、正しいものとして存在し続けます。

数十年の人間の生涯や記憶が伝わる二・三世代の間、あるいは数百年前の記録などと照らし合わせても、ある種類の生物が「変化した」という観察はなされなかったため、生物は昔から今のままで存在していた、という仮説は生き続けたのです。

しかし、世界のことが少しずつ明らかになるにつれ、「世界の始まりに様々な生物が作られ、その後ずっと変化しなかった」という仮説は、^③ つじつまが合わない点がいろいろと出てきたのです。まず、「地球の歴史は聖書に書かれたものよりもずっと古いらしい」ということがわかってきました。

聖書では、地球が創造されてからいままでもおよそ六千年とされていますが、地質学的な調査からは地球の成り立ちはそれよりもはるかに古く、数十億年の昔から、地層が積み重なってきたのではないかとということがわかってきたのです。

また、その古い地層からは植物や魚などの化石が得られ、地層が新しくなるにつれ、爬虫類、鳥、哺乳類の順に化石が現れたのです。

それらの事実を^注整合的に説明しようとするならば、はるかな昔から地球はあり、生物は単純なものから複雑なものへと変化してきたのだと考える必要があります。進化的思考の萌芽です。

しかし、「創造説」の側からの反論もありました。神はいまある形のままに世界をお作りになられたのだ、と。つまり、地

球は数十億年の歴史を持つように見える形で数千年前に作られたのであり、化石生物は実際にはこの地球上で生きていたことはないのだと。このような反論は原理的に^④ 反証不可能です。したがって、この説が間違いであると証明することはできません。現在でも、「創造説」を信じる人々は同様に主張しており、現在の進化に基づく生物観を否定しています。

余談ですが、科学では「^レは無い」ということを証明することはできません。「^レがある」という場合にのみ、それがあるといことが証明されるだけなのです。

ロ、イギリスのネス湖で目撃されたとされるネッシーの搜索は何度も行われていますが、見つかっていません。しかし、「いないのではなく見つからないだけである」という可能性を否定することはできません。「^レは無い」ということは科学で証明できないのです（^レの所には超能力、霊魂、ネッシー、STAP細胞など好きなものを入れてください）。しかし、それでも、地球についての科学的知識が増えていくにつれて、「生物はもしかすると変化してきたのではないだろうか？」という疑問を持つ人が現れてきたのです。その前に立ちはだかったのは、私たちが知っている限り、別の生物へと変化していく生物が見当たらないという事実です。

先に出したノコギリクワガタの例のように、知る限りの生物は数十世代（場合によっては数百年）を経ても何も変わらないように見えるのです。

この「生物は世代を超えても変わらない」というのは、観察事実ですから否定することができません。その一方、化石として発見される生物は現在のものとは違っていました。

ハ、化石生物がそのような化石として創造されたのではなく、昔はそういう形で生きていたとするならば、昔と現在の生物は違う形をしていることになります。つまり、生物は時間とともにその形を変えてきたということになるのです。

「創造説」は一旦おいて、変化説を科学として考えるならば「生物はどのようなメカニズムで世代を超えて変化するのか」

を解き明かさなければなりません。

また、生物には適応現象がありますから、そのメカニズムは「適応がなぜ生じるのか」をも同時に説明できなければならぬでしょう。進化学の歴史において、曲がりなりにもこのような条件を備えた仮説を初めて提示したのはフランスの博物学者ジャン・ラマルクでした。

ラマルク（一七四四—一八二九）は、チャールズ・ダーウィン（一八〇九—一八八二）よりも少し前に活動した博物学者です。生物が時間とともに変化するメカニズムを考え、多様性と適応の進化を説明する学説を初めて公表した学者です。

その学説は⑤「用不用説」と呼ばれます。少し前までの高校生物の教科書では、「用不用説」は最初の進化学説として登場していましたが、ダーウィンの「進化論」の正しさが明らかになるにつれて、いつの間にか取り扱われなくなりつつあります。しかし、「進化論」の歴史を考えれば、ダーウィンに先んじて論理的に整合的な仮説を最初に提案した彼の「用不用説」の歴史上の意義が失われることはありません。

また、最新の生物学の^注知見からは、彼の「用不用説」が必ずしも誤ってはいない可能性が^注示唆されています。その点についてはまた後で述べることにします。

彼の学説はシンプルです。生物の個体は成長とともに変化することは明らかでした。ラマルクのアイデアのベースとなっているのは、成長に加えて、経験が生物の形や性質に影響を与えるという事実です。

例えば、体を鍛えた人は筋肉が発達してたくましい体になりますし、鍛えなかった人と比較すると「できること」も異なります。このように、後天的に獲得した形質が、何らかの形で子どもに伝わるとすれば、生物は世代を超えて変化していくことになります。

しかも、必要に応じて獲得した形質が伝わるのならば、ある環境で必要な形質は発達し伝わり、必要ではない形質は衰退し

て消えていくことになります。そうであれば、生物が住む環境に適応的な性質を備えている理由も理解できます。——すなわち、そこで生きていくためにはその性質が必要だったので発達して子孫に伝わった。これが「用不用説」です。

「用不用説」は、生物が時間とともに変化して Y を獲得していったこと、さらには様々な生物が適応を示すこと、の両方をきちんと説明しています。したがって、科学的に本当であるかどうかを確かめることのできる説明仮説として、科学的研究の対象となり得るのです。

ここが「創造説」とは大きく異なる点です。つまり、「用不用説」は科学的な仮説なのです。「用不用説」の「キモ」は、経験により獲得した形質（獲得形質）が果たして次世代に引き継がれるのかどうか、という点にあります。ここが成立すれば、「用不用説」は原理的に成り立つことになるからです。

しかし、運動により筋肉を発達させた動物を繁殖させても、その子どもは筋骨隆々にはならず、運動させなかった個体の子どもとの差はありませんでした。検証がいくつか行われましたが、どれも獲得形質の遺伝を支持しない結果となりました。いくら論理的に筋が通っていても、事実がそれを裏付けない場合、その仮説が事実であると認めることはできません。ラマルクの「用不用説」は、科学的仮説としての正当性を認められなかったのです。

二、だからといってラマルクが「用不用説」を提出したことの科学的な意義がなくなる訳ではありません。科学の歴史においては、様々な仮説が提出、検証されるなかで矛盾をきたさなかったものだけが生き残ります。

それまでの「生物は神により創造されてずっと変わらずにきた」という科学的検証が不可能な仮説に代わり、論理的に整合性があり、検証可能な科学的仮説としての「用不用説」を提出したラマルクの科学への貢献を忘れてはなりません。

また、「生物は進化しない」という考えを乗り越えて、生物の進化を科学の^注組上にのせたという科学的な意味も忘れてはならないでしょう。「進化論がどのように進化してきたのか」という観点から、ラマルクの「用不用説」の提示は「初めて

の進化論」であり、進化学を追求するものにとって大きな出来事であったのです。
そして登場するのが、進化論の真打ち、ダーウィンでした。

(長谷川英祐『面白くて眠れなくなる進化論』より)

注 ○生態…生物が自然界で生活している状態。○敬虔…うやまいつつしむ気持ちの深さ。○繁殖…生物が生まれてふえていくこと。○整合的…理論の内容がきちんとあっていること。○萌芽…物事が起ころうとすること。○知見…実際に見たりして得た知識。○示唆…それとなく示すこと。○組上にのせた…ある物事を問題として取り上げたこと。

問一、 に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の1～4から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- 1、しかし 2、だから 3、たとえば 4、もし

問二、、 に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の1～4から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

- 1、多様性 2、具体性 3、合理性 4、抽象性

問三、——①「進化論以前の生物観」とあるが、ここではどういうことを言っているのか。空欄に入ることばを本文中から十四字で抜き出さない。

ということ。

問四、——②「なぜ全ての生物が成長するのか？」とあるが、この問いに次のように答えた場合、空欄に入ることばを本文中から三十九字で抜き出さない。

であるから。

問五、——③「つじつまが合わない」とあるが、どんな点をつじつまが合わないと筆者は考えているのか。最も適当なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、聖書に書かれている地球の歴史よりも、はるかに昔から生物が存在していたと考えられる証拠があるという点。
2、地層に含まれる生物の化石を調べてみると、生物は複雑なものから単純なものへと変化している例も見られるという点。
3、地層に含まれる生物の化石を調べてみた結果、聖書に書かれている地球の歴史よりも、実際の歴史はもっと短いと考えられるという点。
4、聖書に書かれている生物の寿命と、化石の研究からわかった生物の寿命とが、一致していないという点。

問六、——④「反証不可能」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、生存していなかったことの証明には、その生物が滅亡した証拠が必要となるが、滅亡した証拠を見つける方法が現代の科学では明らかにされていないから。
2、神が化石を含めてこの世界を作ったという主張を否定しようにも、そもそも「作っていない」ことの証拠など見つけようのないものだから。

- 3、実際に生存したものならば化石が見つかるはずであるが、そうした化石が見つかる可能性が非常に小さいから。
- 4、例えば現時点で化石などが見つからなかったとしても、調査によって今後化石が見つかるかもしれないから。

問七、——⑤「用不用説」とあるが、それはどんなものか。空欄に入ることを、——⑤よりあとの部分で、本文中から三十六字で抜き出さない。

(三十六字)

という説。

問八、——⑤「用不用説」として適当でないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、チンパンジーの親が身につけた知識が、だんだん発達した形で子孫に伝わっていった。
- 2、首の短いキリンが、高いところにある木の葉を食べようとして、首が長くなっていった。
- 3、あらゆる犬がしっぽを使わない状況が続くと、将来的には犬からしっぽはなくなる。
- 4、ヘビには昔は手足があったのだが、使わない状況が長く続いたことにより、手足はなくなった。

四、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「私」は仕事がつまみかず、妻と娘とも離れて暮らさなければいけなくなつた五十代の男性です。生活の苦しさからある夜、「悦子さん」というおばあさんの店「岬カフェ」に盗みに入りましたが、「悦子さん」に見つかります。「悦子さん」の心の温かさに触れ、「私」は自分の行いを反省し、謝ります。次の文章はその翌日のことです。

食事を終えると、さっそく私は「包丁、研ぎます」と申し出た。

「助かるわ。悪いけど、二本お願いしてもいいかしら」

「何本でも」

「じゃあ、たくさんお願い、つて言いたいところだけど、うちには二本しかないのよ」

悦子さんに案内されて、小さなキッチンに立った。二本の包丁と砥石を、悦子さんが棚から出してきた。私はその砥石の表面を指先で撫でた。わりと目の細かな砥石だった。

「砥石は、これひとつですか？」

「あら、足りないの？」

「あ、なければ、いいです。これでも研げますから」

本当なら、もう少し目の粗いものと、より細かい仕上げ用のものがあれば完璧なのだが、これだけでも研げないことはない。

「水に濡らしてもいいタオルか何かは……」

「あるわよ。これでいい？」

悦子さんが布巾を差し出した。

受け取って、それを水で濡らし、四つ折りにして台の上に敷いた。さらに、その布巾の上に濡らした砥石をセットする。こうすると、砥石がしっかりと固定できるのだ。

包丁は、一般家庭で普通に使われる両刃と、小さめの出刃の二本だった。(イ) 私は出刃を手にして、右目を閉じた。包丁の刃を上にした状態で寝かせ、それを左目の前にへ A 〓と持ってくる。ちょうどライフルを撃つ人が照準器を覗き込むような格好で、私は刃の山をじっくりと観察したのだ。

「たしかに、これは切れないな……。じゃあ、研ぎます」

両手でしっかりと包丁を持ち、刃を砥石の上に載せた。そして、静かに前後にスライドさせる。

「やっぱり、プロは手さばきがいいわね」

感心したように言って、悦子さんは腕を組んだ。私は「どうも」と笑って答えて、手先の感覚に神経を集中させた。

シユツ、シユツ、シユツ……。

鋼と砥石のこすれる音と、手応え。懐かしい感覚だった。包丁を作っていたときは、モーターを使った回転式の砥石で研いでいたのだが、仕上げはこうして棒の砥石を使っていたのだ。

やはりいちばん最後は、人間の感覚に頼らざるをえない。

シユツ、シユツ、シユツ……。

研ぐほどに、昔の感覚が戻ってくるような気がした。

「じゃあ、包丁研ぎはあなたにお任せして、わたしはちょっとコタローの散歩に行ってきたいいかしら」

「コタローって、あの白い犬……」

「そう。彼はコタローっていうの。まだ、この時間じゃ、お客さんはこないから、留守番よろしくね」

「あ、はあ……」

悦子さんは、くると身を翻すと、さっさと店から出て行ってしまった。

それにしても——。昨夜、泥棒としてこの店に忍び込んだ男に、あっさり留守を任せてしまうとは……。あの人は、どこまで用心な人なのだろう。いや、どこまで他人を信用するつもりなのだろうか。

元泥棒に本気で心配されている悦子さんのことを思ったら、なんだか笑えてきた。私はにやにやしながら、再び包丁を研ぎはじめた。

(ロ) しばらくして、私はキッチンの台の上に、キンキンに研ぎ上げた二本の包丁を並べて置いた。

「よし。出来た……」

一個の細胞をへBへ半分に切れるくらいの鋭さを、この二本の包丁は身につけていた。ここまで完璧に研げる人間は、プロのなかでもそうはいない。

私は、久し振りに、仕事の後の心地よい充実感を味わっていた。出来ることなら、あと数本は研ぎたいくらいだった。包丁を研いでいるときの、あのa心にされたような静かな感覚が、たまらなく懐かしかったのだ。包丁と、砥石と、へCという摩擦音だけが世界のすべてに感じられる、あの究極の感覚——。

そして、研ぎ上げた刃を確認したときの充実感。

私は、あらためて思った。好きだったのだ。「研ぎ屋」という仕事。そして、自分のbに、注ゆるぎない誇りを抱いてもいたのだ。

ふと思いついて、私は自分のリュックのなかから自前の出刃包丁を取り出した。専門店で買えば、数万円は下らない一級品だ。当然だが、その刃はすでに完璧以上に研ぎ上げられていた。

(ハ)、濡らした砥石の粉を樹脂につけ、それで刃先の上を丁寧にくすることでツヤを消してあった。これは日本刀の仕上げに使われる「内雲」という特別な技法だ。この包丁は、切れ味はもちろん、見た目の美しさにまでこだわった究極の本なのだ。もはや私のプライドそのものと言ってもいい。

私は、この包丁を、そっと下から支えるように両手で持った。

「可愛がってもらえよ」

つぶやくように言って、他の二本の包丁と一緒にキッチンの棚にそっとしまった。

それから数分で、悦子さんが戻ってきた。キッチンのぞを覗くなり、さっそく冗談じやうだんを飛ばす。

「あら、まだいたの。せっかく逃げるチャンスあげたのに」

私は朝食に使った皿洗いをしていたのだ。

「せめて自分の使った皿くらい、洗ってから逃げようと思って」

私も冗談で返してみた。

悦子さんは愉快ゆかいそうに笑う。

「で、包丁は？」

「ばっちり研いで、しまっておきました。二本とも」

「ありがとう。助かるわ」

「いえ……」

「あ、そうそう。皿洗いよりも、お願いしたいことがあるの」

軽い口調で言いながら、悦子さんはキッチンの脇わきにある古いまオーディオのボタンを操作した。

「あ、何でも言ってください」

「じゃあ、お遣いつかいを頼まれてね。はい、これ、お金」

「D」と茶封筒ちやふうとうを差し出された。

「泥棒に、お金を預けていいんですか？」

「いまから研ぎ屋さんに転職してちょうだい」

二人して、悪戯いたづらっぽい顔で笑い合う。

そして私が茶封筒を両手で受け取ったとき、どこかで聞いたような音楽が流れ出した。しっとりとした、静かな前奏。

「あつ……」

私は、思わず声を出していた。

悦子さんは、小さく頷うなずいて微笑んだ。

祈る人——『ザ・注・プレイヤー』だった。

「せっかくプロの研ぎ師が、わざわざ窓から入ってきてくれたんだから、ホームセンターに行って、いちばんいい砥石といしをいくつか選んで買ってきてもらおうと思ったのよ」

お遣いって、それなのか？

「でも、もう、さっきの二本は研ぎ終わってますけど……。充分じゅうぶんによく切れますよ」

「いいのよ。今後のために買っておきたいだけだから。あなたが選んでくれたら、それがいちばんでしょ」

たしかに、^②素人ひなが砥石を選ぶよりずっといい。

「じゃあ、ええと、ホームセンターの場所は？」

「岬みさきを向こうに歩いていって、国道に出たら、右に行って、トンネルをくぐって坂道を降りて、ひたすらまっすぐ行けば、右手に見えてくるわ。ちょっと遠いけど、いいかしら？」

「大丈夫です」

「じゃ、お願いね。くれぐれも、いちばんいい砥石にしてね」

「はい」

私は c を返して、店の出口に向かって歩き出した。その後ろを悦子さんがついてくる。店を出たところで、私は半身になって振り返った。

「じゃ、ちょっと、行ってきます」

右手を上げて、そう告げた。しかし、悦子さんは「気をつけてね」と言いながら、店の外にまで出てきた。

私はテラスの前を横切り、白い犬に手を振って、てくてく歩いていく。店の外に設置されたスピーカーからも、『ザ・プレイヤー』が流れていた。曲は、まさにいま、男女のヴォーカルの歌声が、一気に盛り上がっていくところだった。

私は、その美しい祈りの曲を背中で聴きながら、しばらく雑草のなかの轍まわたちに沿って歩いた。

(二)、白い犬が短く吠えた。

なんとなく、気になって振り返ると、遠いテラスの上から悦子さんが大きく手を振っていた。足元には、あの白い犬がいる。私も、ちょっと照れながら、小さく手を振り返した。

ホームセンターは、予想以上に遠かった。

海沿いの田舎道いなかを、歩けど、歩けど、それらしき建物は現れなかったのだ。途中、小さなJRの駅の入口とぶつかる交差点があり、それを越えてからさらに十五分ほど歩き続けて、そこで、ようやく遙か遠くに見えてきたほどだ。男の私の足でも、軽く三十分はかかっただろう。

広々としたホームセンターは、しかし休日のせい、わりと混雑していた。私はさっそく刃物のコーナーに足を運び、ずらりと棚に陳列された砥石をひとつひとつ丁寧ていねいにチェックしていった。そして、目の粗いもの、中くらいのもの、細かいものの三種類を手にして、レジの列にならんだ。いちばん高価な天草産あまくさの天然石を使った粗砥石でも二千円ほどだったのだが、万一、お金が足りなかったら困るので、上着のポケットから、あずかった茶封筒を抜き出した。あらかじめ金額を確かめておこうと思ったのだ。

茶封筒の上から触った感じでは、札が数枚入っているようだった。千円札なら七、八枚ほどになるか。だとしたら、充分に足りるが……。

私は封筒の中身を引き出した。

と、その刹那せつな、私は「ん？」と声を出していた。

封筒のなかには一万円札と五千円札がそれぞれ一枚と、千円札が七枚、さらに、折り畳まれた便箋びんせんが一枚入っていたのだ。とりあえず、お札はすべて封筒に戻して、私は便箋だけを抜き取った。三つ折りになっていた便箋を、丁寧に広げる。縦書きの野線けいせんに沿って、海を想わせる藍色の文字が、きれいに並んでいた。

私はその達筆な文字を、一字一句漏らさぬよう、じっくりと目で追っていた。

包丁、研いでくれてありがとう。

これはその代金のつもりです。

いい砥石を買って、またお仕事をがんばってくださいね。

そして今度は、dとして、

わたしのコーヒーを飲みにいらしてね。

そのときは、もつともつと美味しくいれるから。

岬カフェ 悦子

よく見れば、封筒のいちばん奥に、岬カフェの名刺も入っていた。九枚のお札は、どれもかなりくたびれていた。私に気づかれないよう、こっそりとレジから抜いた金に違いなかった。

私は、あらためて、もう一度、便箋に目を通した。

読んでいるうちに、藍色の文字の列がゆらゆらと揺れ出した。

私の目に、また、しずくがわき出してしまったのだ。

「ちよつと、ほら、前が空いてますよ」

レジの列の後ろに並んでいた^注壮年の男性に肩を突つかれた。

「す、すみません」

小声で答えて、少し前に詰めた。

やがて、私の順番が回ってきた。

茶色い髪をしたレジ打ちの女の子は、^③泣いている私を不審な目で見た。それでも、私は構わずほろほろと涙を流し続けた。

「この砥石、三つとも……、プレゼント用に……、包んでもらえますか？」

私は、かすれた声でレジの女の子に頼んだ。

「え？ ああ、はい。ええと、それでしたら、お支払い後に、あちらのサービスカウンターでお申し込みください」

女の子は、緊張した面持ちで、入口の脇にあるカウンターを指し示した。

私はうなずいて、ぬくもりのある五千円札を手渡した。

釣り銭を受け取り、サービスカウンターへと歩き出す。

歩きながら、考えていた。

この砥石は、悦子さんからの「お祝い」のプレゼントだ、と。

^④新しく生まれ変わった自分に、贈ってくれたのだ。

私は、自らに誓った。

このプレゼントのリボンをほどいた瞬間から、これからの自分の人生と、別れた妻と娘の人生と、そして悦子さんの人生を——心から祈り続けることを。

(森沢明夫『虹の岬の喫茶店』より)

注 ○スライド…滑らせること。○銅…焼ききたえて強くした鉄。○ゆるぎない…しっかりとした。○樹脂…樹木からにじみでるねばりけのある物質。○オーディオ…オーディオ装置の略。レコードやCDなどを再生する装置のこと。○プレイヤー…ここでは「祈る人」という意味。

○轍…車輪の跡。○刹那…瞬間。○壮年…働き盛りの年頃。

問一、(イ) (ニ) に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の1～4から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

1、しかも 2、まず 3、やがて 4、それから

問二、(A) (D) に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の1～4から選び、番号で答えなさい。ただし、同じものを二度以上用いてはいけません。

1、シュツ、シュツ、 2、スツパリ 3、ひよい 4、ピタリ

問三、a に最も適当な漢字一字を入れ、「何かに夢中になっている様子」という意味になるようにしなさい。

問四、b、c にはそれぞれ体の一部を表わすことばが入る。b には「技術」という意味になる最も適当なひらがな二字を、c には「向きを変える」という意味になるひらがな三字を答えなさい。

問五、d にあてはまる最も適切なことばを本文中から探し、四字で抜き出しなさい。

問六、――①「頼らざるをえない」とあるが、この意味として最も適切なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、頼るのはどうか。 2、頼ってみよう。 3、頼るしかない。 4、頼ってはいけない。

問七、――②「素人」の正しい読み方をひらがなで答えなさい。

問八、――③「泣いている私」とあるが、「私」が泣いた理由を次のようにまとめた際に、e、f に入る最も適切なことばをそれぞれ本文中より指定の字数で抜き出しなさい。

店に盗みに入ったにも関わらず、「悦子さん」は「私」を e 二字 してくれ、「研ぎ屋」としての f 四字 を
思い出させてくれた。手紙を読んで「悦子さん」の心の温かさを改めて感じ、「私」は胸がいっぱいになり、涙を流した。

問九、――④「新しく生まれ変わった自分」とあるが、「新しく生まれ変わる」とはどういうことか。最も適切なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、過去のことはすべて忘れて生きていくということ。 2、「研ぎ屋」以外の仕事を見つけるということ。
3、今までのプライドを捨てるということ。 4、与えられた機会をいかすということ。

問十、「悦子さん」はどんな人物として描かれているか。最も適切なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1、明るい性格で、「私」に対して遠慮がまったくない人物。
2、優しい性格だが、気が弱く、ひかえめでおとなしい人物。
3、ユーモアがあり、他人のことを思いやれる心の広い人物。
4、何よりも仕事を大切にする、非常にまじめできちんとした人物。

以下白紙

J
1四

得 点